

國學院大學學術情報リポジトリ

日本の総合雑誌における中国イメージ研究(1993-2010) :

『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』の中国関連報道を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 琳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001592

日本の総合雑誌における中国イメージ研究 (1993-2010)

——『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』の中国関連報道を中心に

Research on Chinese Image in Japanese general interest magazines (1993-2010):

China-related articles in *Sekai*, *Chūōkōron*, *Bungeishunjū*

鄭 琳

キーワード：総合雑誌 中国関連報道 中国イメージ 論調

关键词：综合杂志 涉华报道 中国形象 报道倾向

要旨

『世界』『中央公論』『文藝春秋』はともに日本社会において代表的な月刊総合雑誌であり、それぞれの論調は「リベラル」、「中道的」、「保守的」と評価されている。1993年から2010までの三誌の中国イメージについて考察したところ、左よりの論調傾向である『世界』は中国に対し友好的で、中道的な『中央公論』は(日本の)国家利益至上主義、右よりの『文藝春秋』は中国を悪者だと認識していた。

摘要

日本最具代表性的三种综合杂志有《世界》、《中央公论》和《文艺春秋》。在这三种杂志中，《世界》标榜着“进步立场”，《中央公论》持“中立立场”，《文艺春秋》则属于典型的“保守立场”。通过考察1993年-2010年三种杂志中的中国形象后发现，《世界》的报道倾向为对中国较为友好，《中央公论》是从(日本)国家利益的角度分析中国与两国关系，《文艺春秋》则带着有色眼镜，力求对中国的国家形象进行妖魔化。

はじめに

2015年3月、中国外文局が発表した『2014年中国国家イメージに関するグローバル調査』が世間の注目を集めた。調査対象となった8ヶ国(イギリス、アメリカ、オーストラリア、日本、南アフリカ、インド、ブラジル、ロシア)のうち、日本は中国に対しプラスの評価が最も低い国であった。このことからわかるように、両国関係が良好であるかどうかはそのまま相手国国民の中国に対する評価にも影響を与えやすい。では、冷戦終結後の1990年代から2000年代にかけて、日本輿論界の中国イメージはどのようなものであったのか。この疑問を解決する

ため、本稿は日本の総合雑誌というメディアに焦点を当て、冷戦終結の1993年から2010年までの日本の知識人の中国関連評論に注目し、この時期の日本輿論界における中国イメージについて考察する。

協力と対立が共存している今日の中日関係の背景の中で、ここ二十年來の両国関係の流れを把握することは、日本がどのような視野から中国を観察したのかをよりよく知るだけでなく、未来の両国関係を展望する上でも助けになると考えられる。総合雑誌を通して日本輿論界を考察することはある程度限界があると自覚しているが、それでも筆者がこれを本論文の研究対象にした理由は、総合雑誌が学术界と一般大衆をつなぐ重要な媒介だからである。なお、雑誌の選定にあたっては、発行部数・影響力・論調などの要素をふまえたうえで『世界』（岩波書店発行）『中央公論』（中央公論新社発行）『文藝春秋』（文藝春秋社発行）の三誌とした。三誌はともに日本社会において代表的な月刊総合雑誌であり、それぞれの論調は「リベラル」、「中道的」、「保守的」と評価されている⁽¹⁾。近年では、発行部数の減少による採算割れにも関わらず前述の雑誌を始めとして、幾つもの雑誌がいまだ存続しており、少ない発行部数から影響力は限定されるが、市場の論理を超えた独自の「言論の場」を形成している。

1. 『世界』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

1.1 1990年代『世界』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表1-1 『世界』の中国関連報道の年度分布⁽²⁾

年度	93	94	95	96	97	98	99	00	合計	年平均報道数
報道数	12	39	22	39	54	30	15	17	228	28.5

表1-1からわかるように、1993年-2000年における『世界』の中国関連報道のうち、毎年の平均報道数は28.5篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは1997年の54篇で、最も少なかったのは1993年の12篇である。

(1) 佐藤都「日本の総合雑誌3誌の数量・内容分析からみる日本人の中国に対する関心の変遷」、『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』、2012年3月、100頁。

(2) 本稿で使われたすべての表の数値は筆者が三誌の報道をもとに統計・分析して得たデータである。

表1-2 『世界』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	49	19	46	17	22	30	8	4	5	28	228
比率	21.5%	8.3%	20.2%	7.4%	9.6%	13.2%	3.5%	1.7%	2.2%	12.3%	100%

表1-2のジャンル別分布で見た場合、『世界』で最も多かったのは政治問題(計49篇)で、全体の21.5%を占める。その次は歴史問題(計46篇)で、全体の20.2%を占める。文化と社会問題に関する報道も比較的多く、それぞれ13.2%と9.6%を占めている。

1. 政治関連の報道における中国イメージ

この時期の『世界』の政治関連報道は主に冷戦後の東アジアにおける秩序の変化(袴田茂樹・毛里和子・和田春樹「冷戦後東アジアの地域秩序」、『世界』1998年1月号)や鄧小平が亡くなった後の中国指導層の変化(高原明生「ポスト鄧小平時代の指導層」、『世界』1994年8月号)、香港が中国に返還される前後の動きなど(朱建栄「香港返還の政治力学」、『世界』1997年2月号)に集中している。

2. 歴史関連の報道における中国イメージ

1990年代『世界』の歴史関連報道は、主に日本の戦争責任を認める報道が目立つ。具体的には、日本がかつて中国の東北地区で侵略統治を行っていた新史料が公開されたことである。中には元関東軍メンバーの口述記録もあった(小林英夫・小林庄一・石堂清倫「満鉄調査部と日中戦争」、『世界』1997年8月号;藤原彰「三光作戦の史料的意義」、『世界』1998年5月号;古海忠「満州国の内幕」、『世界』1998年6月号)。これは、日本が侵略した事実を否定的だった保守派雑誌とは鮮明な比較となった。

3. 文化関連の報道における中国イメージ

この時期の『世界』の文化関連報道は、中国の漢字文化や儒教思想など伝統文化関連の内容が多い(一海知義・加藤周一「漢字文化圏の未来」、『世界』2000年6月号;古田博司「儒教と東アジア」、『世界』1997年7月号)。このほかにも、香港が中国に返還される影響から香港の流行文化や香港映画に関する報道も取り上げられた(谷垣真理子「香港映画」、『世界』1993年12月号;小倉英治「HONGKONG NOSTALGIA」、『世界』1997年月6号)。

1.2 2000年代『世界』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表1-3 『世界』の中国関連報道の年度分布

年度	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	合計	年平均報道数
報道数	41	26	18	19	25	26	26	23	11	33	248	24.8

表1-3からわかるように、2001年-2010年における『世界』の中国関連報道のうち、毎年の平均報道数は24.8篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは2001年の41篇で、最も少なかったのは2009年の11篇である。

表1-4 『世界』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	38	22	52	29	27	8	5	4	11	52	248
比率	15.3%	8.9%	21%	11.7%	10.9%	3.2%	2%	1.6%	4.4%	21%	100%

表1-4のジャンル別分布で見た場合、この時期『世界』で最も多かったのは歴史問題（計52篇）で、全体の21%を占める。その次は政治問題（計38篇）で、全体の15.3%を占める。外交と社会問題に関する報道も比較的多く、それぞれ11.7%と10.9%を占めている。1990年代と比べ、外交関連の報道が増え、文化関連の報道が減っているのがわかる。

1. 歴史関連の報道における中国イメージ

2000年代『世界』の歴史関連報道は戦争を反省し、日本の侵略性と加害性を認めている報道が多く、特集を組んで報道している（「特集 南京事変70周年」、『世界』2008年1月号；「特集 盧溝橋事変70周年」、『世界』2007年8月号）。このような論調は『中央公論』や『文藝春秋』ではまず見られない。

2. 政治関連の報道における中国イメージ

この時期『世界』の政治関連報道は主に東アジア共同体の建設と、中国大陸と台湾の関係緩和の二つに集中していた。『世界』は現在の中国大陸と台湾は大陸側が優勢にあり、兩岸関係も確かに改善されたという見方であった（本田善彦「馬英九政権誕生で転換期を迎える日中台」、『世界』2008年5月号）。また、中米関係と中朝関係および北朝鮮の核問題での中国の果たした役割にも高く評価した。

3. 外交関連の報道における中国イメージ

『世界』の外交関連報道では、中日両国交流の重要性を強調し、両国関係の改

善を呼びかけた。例えば、2005年の反日デモについて『世界』は国民感情の角度から分析し、中国の態度に理解を示し、過剰に中国の反日について強調することはなかった（河野洋平「日中“政冷”局面に対する憂慮—日本の外交と国際貢献」、『世界』2005年1月号）。

2. 『中央公論』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

2.1 1990年代『中央公論』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表2-5 『中央公論』の中国関連報道の年度分布

年度	93	94	95	96	97	98	99	00	合計	年平均報道数
報道数	21	17	23	24	26	16	17	10	154	19.3

表2-5からわかるように、1993年-2000年における『中央公論』の中国関連報道のうち、毎年の平均報道数は19.3篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは1997年の26篇で、最も少なかったのは2000年の10篇である。

表2-6 『中央公論』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	42	12	10	14	14	21	2	2	3	34	154
比率	27.2%	7.8%	6.5%	9.1%	9.1%	13.6%	1.3%	1.3%	1.9%	34%	100%

表2-6のジャンル別分布で見た場合、この時期『中央公論』で最も多かったのは政治問題（計42篇）で、全体の27.2%を占める。その次は文化問題（計21篇）で、全体の13.6%を占める。外交と社会問題に関する報道も比較的多く、ともに9.1%を占めている。

1. 政治関連の報道における中国イメージ

この時期の『中央公論』の政治関連報道は主に香港の中国返還と中国指導層の変化に集中していた（William H. Overholt「鄧小平逝去後の中国をどう読み解くか」、『中央公論』1996年3月号；枝川公一「香港市民の心の声」、『中央公論』1997年1月号；沈才彬「朱鎔基の人脈と政脈」、『中央公論』1999年6月号）。

2. 文化関連の報道における中国イメージ

『中央公論』の文化関連報道の特徴は、取り上げられた話題が多岐にわたって

いることである。故宮や三国志など中国の伝統文化に関するものもあれば、客家文化や中国映画に関するものもあった（後藤多聞「NHK special 故宮取材記録」、『中央公論』1996年10月号；陳舜臣・稲田耕一郎「三国志の肉声と魅力」、『中央公論』1998年5月号；根津清「客家」、『中央公論』1994年7月号）。

3. 外交関連の報道における中国イメージ

1990年代『中央公論』の外交関連報道の論調はあまり明確ではなく、東アジアは今後どう歩むべきかについて考えるのもあれば、中国といかに付き合うべきかに関する報道もあった（孫崎亨「東アジアの新外交課題」、『中央公論』1998年4月号；船橋洋一「中国との付き合い方を間違えてはならない」、『中央公論』1998年7月号）。

2.2 2000年代『中央公論』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表2-7 『中央公論』の中国関連報道の年度分布

年度	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	合計	年平均報道数
報道数	8	18	24	34	53	36	25	30	16	24	268	26.8

表2-7からわかるように、2001年-2010年における『中央公論』の中国関連報道のうち、毎年の平均報道数は26.8篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは2005年の53篇で、最も少なかったのは2001年の8篇である。

表2-8 『中央公論』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	53	19	26	27	43	17	4	10	6	63	268
比率	19.8%	7.1%	9.7%	10.1%	16%	6.3%	1.5%	3.7%	2.2%	23.5%	100%

表2-8のジャンル別分布で見た場合、この時期『中央公論』で最も多かったのは政治問題（計53篇）で、全体の19.8%を占める。その次は社会問題（計43篇）で、全体の16%を占める。外交と歴史問題に関する報道も比較的多く、それぞれ10.1%と9.7%を占めている。1990年代に比べ、文化関連の報道が減少し、歴史関連の報道が増えたのがこの時期の『中央公論』の特徴である。

1. 政治関連の報道における中国イメージ

この時期の『中央公論』の政治関連報道は主に中国のナショナリズムの感情が

高まっていることに警戒すべきという見方と、中国は自国の台頭に伴い必ずアジア地域での覇権掌握を狙いとするので日本にとっては脅威となるという観点である(笹島雅彦「領土問題から見る中国ナショナリズムの政治手法」、『中央公論』2004年6月号)。

2. 社会関連の報道における中国イメージ

『中央公論』の社会関連報道は主に中国の貧富の差の拡大と人権問題に対する批判および社会の腐敗などに焦点を当てていた(八木沢高明「中国がん村、エイズ村の苦悩」、『中央公論』2008年7月号；北村豊「北京オリンピック後の中国社会の焦点は何か」『中央公論』2008年3月号)。

3. 外交関連の報道における中国イメージ

『中央公論』の外交関連報道の論調はきわめて現実主義で、主な観点は中日関係の悪化は日本の国益に反するものであり、日本の国連安保理の常任理事国入りと北朝鮮問題はともに中国の助けが必要となる。よって、小泉総理の対中政策に反対し、中日関係の改善を主張するという物であった(中曽根康弘・橋本五郎「小泉君、外交からポピュリズムを排除しなさい」、『中央公論』2005年8月号；舛添要一「無策な小泉政権では事態打開は困難」『中央公論』2005年9月号)。

3. 『文藝春秋』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

3.1 1990年代『文藝春秋』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表3-9 『文藝春秋』の中国関連報道の年度分布

年度	93	94	95	96	97	98	99	00	合計	年平均報道数
報道数	6	7	8	11	12	8	6	3	61	7.6

表3-9からわかるように、1993年-2000年における『文藝春秋』の中国関連報道のうち、毎年平均報道数は7.6篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは1997年の12篇で、最も少なかったのは2000年の3篇である。

表3-10 『文藝春秋』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	10	4	5	2	6	11	0	0	3	20	61
比率	16.4%	6.5%	8.2%	3.3%	9.8%	18%	0%	0%	3%	32.8%	100%

表3-10のジャンル別分布で見た場合、この時期『文藝春秋』で最も多かったのは文化問題(計11篇)で、全体の18%を占める。その次は政治問題(計10篇)で、全体の16.4%を占める。社会と歴史問題に関する報道も比較的多く、それぞれ9.8%と8.2%を占めている。同時期の『世界』や『中央公論』に比べ、『文藝春秋』の中国関連報道はかなり少なく、1990年代『文藝春秋』は中国にあまり注目していなかったことがわかる。

1. 文化関連の報道における中国イメージ

この時期『文藝春秋』の文化関連報道は、全体的には中国に対し友好的な書き方であった。具体的には、中国の古代文明や京劇などの伝統芸術に対し肯定的な態度をとっていた(梅原猛「大発見!これが中国最古の神殿遺跡だ」、『中央公論』1996年12月号;服部礼次郎「京劇と辜振甫さん」、『中央公論』1998年11月号)。保守派論調の『文藝春秋』であっても、かつて日本が大きな影響を受けた中国の伝統文化に対しては盲目的に否定せず、肯定的であった。

2. 政治関連の報道における中国イメージ

『文藝春秋』の政治関連報道は主に鄧小平亡き後中国の政治情勢は安定できるか否かと、香港の中国返還に集中していた(中嶋嶺雄「最後の皇帝鄧小平が残した大いなる矛盾」、『文藝春秋』1997年4月号;佐々淳行「香港暴動」、『文藝春秋』1996年12月号)。

3. 社会関連の報道における中国イメージ

1990年代『文藝春秋』の社会関連報道は中国の未来に対する根拠に欠く悲観的予測が多く、具体的には21世紀になったら中国は必ず崩壊するなどの見方である(深田祐介「慕情の都が猿の惑星になった」、『文藝春秋』1997年7月号;中西輝政「世界の敵中華帝国は必ず滅びる」、『文藝春秋』1999年6月号)。ここからも、『文藝春秋』がほかの2誌と異なり、学術性や客観性を重視するよりも煽動的な題名で読者の関心を集める一面が強いのがうかがえる。

3.2 2000年代『文藝春秋』のジャンル別中国関連報道と中国イメージ

表3-11 『文藝春秋』の中国関連報道の年度分布

年度	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	合計	年平均報道数
報道数	19	27	30	18	19	26	30	20	5	20	214	21.4

表3-11からわかるように、2000年-2010年における『文藝春秋』の中国関連報道のうち、毎年の平均報道数は21.4篇である。そのうち、報道数が最も多かったのは2003年と2007年でともに30篇、最も少なかったのは2009年の5篇である。

表3-12 『文藝春秋』の中国関連報道のジャンル別分布

ジャンル	政治	経済	歴史	外交	社会	文化	環境	軍事	文学	その他	合計
報道数	31	34	26	7	39	13	3	3	5	53	214
比率	14.5%	15.9%	12.1%	3.3%	18.2%	6.1%	1.4%	1.4%	2.3%	24.8%	100%

表3-12のジャンル別分布で見た場合、この時期『中央公論』で最も多かったのは社会問題（計39篇）で、全体の18.2%を占める。その次は経済問題（計34篇）で、全体の15.9%を占める。政治と歴史問題に関する報道も比較的多く、それぞれ14.5%と12.1%を占めている。2000年代に入り『文藝春秋』の中国関連報道はかなり増加し、中国に対する関心が明らかに高まっていることがわかる。1990年代に比べ、文化関連の報道が減少し、外交関連の報道が増えたのも一つの特徴である。

1. 政治関連の報道における中国イメージ

この時期の『文藝春秋』の政治関連報道は主に中国の政治体制や行政・司法の不平等に対する批判が多い。また、中国政府が領土問題、油田開発、毒餃子事件などで日本に対し強硬な態度を示すことに対する批判もあった（作者多数「中国を信じられない100の理由」、『文藝春秋』2009年7月号）。

2. 経済関連の報道における中国イメージ

『文藝春秋』の経済関連報道の論調は中国経済に過度な期待を寄せることに警鐘を鳴らす見方や、中国から輸入する食品の安全性を疑う観点などがあった（草野厚・深田祐介「進出日本企業泣かされる」、『文藝春秋』2001年10月号；平野久美子「中国茶ブームの怖い話」『文藝春秋』2002年8月号）。また、『文藝春秋』は中国経済の高度成長に懐疑的で、中国経済は遅かれ早かれ必ずや崩壊するという主張であった。

3. 歴史関連の報道における中国イメージ

『文藝春秋』の歴史関連報道の論調は自国本位で、日本の戦争責任を否定する論調が目立った。具体的には、慰安婦問題は中国の政治的陰謀であり、中国が日本首相の靖国神社参拝に抗議することは日本の内政への干渉だという主張もあっ

た(古森義久「慰安婦決議」ホンダ議員の策謀、『文藝春秋』2007年5月号；桜井よし子・田久保忠衛「靖国参拝の何が悪いというのだ」『文藝春秋』2005年8月号)。

4.1990年代から2000年代日本総合雑誌における中国イメージの変遷

表4-13 1990年代の三誌別中国関連報道数と論調

雑誌	肯定的 (比率)	中性的 (比率)	否定的 (比率)	合計
『世界』	81 (35.5%)	101 (44.3%)	46 (20.2%)	228 (100%)
『中央公論』	38 (24.7%)	79 (51.3%)	37 (24.0%)	154 (100%)
『文藝春秋』	12 (19.7%)	17 (27.9%)	32 (52.4%)	61 (100%)

表4-13にまとめた1990年代中国関連報道の総合データで見た場合、『世界』の228篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのが81篇で全体の35.5%を占め、中性的な報道が101篇で全体の44.3%、否定的な報道が46篇で全体の20.2%という結果であった。ここからもわかるように、『世界』の中国関連報道は全体的に見て中性的で肯定的な傾向があらわれている。

『中央公論』の場合は154篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのが38篇で全体の24.7%を占め、中性的な報道が79篇で全体の51.3%、否定的な報道が37篇で全体の24%という結果であった。中立的スタンスの特徴が『中央公論』の中国関連報道にもよくあらわれている。

『文藝春秋』の61篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのが11篇で全体の19.7%を占め、中性的な報道が17篇で全体の27.9%、否定的な報道が32篇で全体の52.4%という結果であった。『文藝春秋』は他の二誌と比べ、1990年代は中国関連報道の数自体があまり多くなく、日本の保守派はこの時期まだあまり中国には関心がなかったのがわかる。

全体的に見た場合、左寄りの『世界』以外、1990年代には中立派の『中央公論』と右寄りの『文藝春秋』のどちらも中国関連報道は比較的少なく、報道の論調もあまり過激ではなく、論調も本来の雑誌の立場に沿ったものが多く、当時の日本社会の影響をあまり受けてはいない印象を受ける。

表4-14 2000年代の三誌別中国関連報道数と論調

雑誌	肯定的 (比率)	中性的 (比率)	否定的 (比率)	合計
『世界』	87 (35.1%)	113 (45.6%)	48 (19.4%)	248 (100%)
『中央公論』	50 (18.7%)	115 (42.9%)	103 (38.4%)	268 (100%)
『文藝春秋』	11 (5.14%)	74 (34.6%)	129 (60.3%)	214 (100%)

表4-14にまとめた2000年代中国関連報道の総合データをみると、『世界』の248篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのが87篇で全体の35.1%を占め、中性的な報道が113篇で全体の45.6%、否定的な報道が48篇で全体の19.4%という結果であった。ここからもわかるように、『世界』の中国関連報道は全体的に見て中性的で肯定的な傾向があらわれている。この数値は1990年代の頃と比べてもほとんど変化はなく、『世界』は従来のスタンスを保ち続けていることがわかる。

この時期の『中央公論』の場合は268篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのが50篇で全体の18.7%を占め、中性的な報道が115篇で全体の42.9%、否定的な報道が103篇で全体の38.4%という結果であった。1990年代の中立的スタンスとは異なり、2000年代に入り『中央公論』の中国関連報道は中国に対し否定的なものが明らかに増え、この時期における『中央公論』の全体的な報道スタンスも中性的で否定的な論調が中心となった。これは中央公論新社が経営難により1999年読売新聞社に合併されたことで保守色が増したのと密接な関係がある。

『文藝春秋』の篇の中国関連報道のうち、中国に対し論調が肯定的なのは11篇のみで全体の5.14%を占め、中性的な報道が74編篇で全体の34.6%、否定的な報道が129篇で全体の60.3%という結果であった。この数値からもわかるように『文藝春秋』の中国関連報道は中国に対して否定的な見方が主流を占める。中国関連報道の数が少なかった1990年代と違い、中国の台頭と両国間の摩擦が増えるにつれ、2000年代の『文藝春秋』の中国関連報道数は多く増加した。1990年代と比べ、中国に対し肯定的な報道はかなり少なく、多くは否定的な報道であり、日本の保守派の論調がより過激さを増したことがわかる。

このように、そ三誌の報道傾向と中国イメージはは明らかに異なっている。『世界』の中国イメージは比較的客観的で、中国に対し友好的な見方が主流である。『中央公論』の場合は中国と日本両方の立場から報道しており、日本の国益の

ためには中国と友好関係を保つべきだという最も現実的な考え方である。『文藝春秋』の中国イメージでは、古代中国の文明は価値あるものだが、現代中国は非民主的で人権のない国であり、貧富の差が大きく汚職や腐敗問題が深刻だという風に書かれている。また、三誌で活躍する執筆陣の構成や各誌の中国論をリードする研究者の顔ぶれと論調をみても『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』がなぞりべラル、中道的、保守的という風に認識されているのかうなずける結果となった。

おわりに

以上、本稿では日本の月刊総合雑誌の代表である『世界』、『中央公論』、『文藝春秋』の1993年から2010年までの中国関連報道について統計・分析を行い、三誌の中国イメージについて考察した。筆者の力不足により言説分析は粗雑さを免れず、分類の際にも筆者の主観的要素が入っていることは否めない。

全体的に見て、左よりの論調傾向である『世界』は中国に対し友好的で、中道的な『中央公論』は(日本の)国家利益至上主義、右よりの『文藝春秋』は中国を悪者だと認識していた。日本の大衆メディアは“客観的、公平さ”をモットーとしていると言っているが、実際はごく一部の左よりの雑誌を除き、ほとんどが中国の台頭に対し冷静かつ客観的な視野を保てなかったといえる。左よりの雑誌は中国関連報道の総数は多いものの、発行部数と社会的影響力は右よりの雑誌に比べかなり劣っている。また、中国に対し比較的友好な左よりの雑誌であっても、中国を擁護する言論のほとんどは在日中国人の学者や記者によって発表されたものであり、リベラル派の日本人学者や記者は正確かつ客観的に中国を認識すべきだという程度にとどまっている。右よりの保守的雑誌に至っては中国の発展は周辺国家や日本に脅威をもたらすと主張し、中国の社会問題やリスクについて過度に強調する傾向が強い。そして、これらの総合雑誌で活躍する著名な作者たちのこのような言論は、日本国民の中国認識の悪化を促進させるうえで一定の影響を与えたと考えられ、そしてこのような傾向は今後どんどん強くなると予測される。いわばこの時期の日本総合雑誌の中国関連報道にあらわれた日本輿論界の中国イメージと中国認識の変化は、1990年代以来日本社会が日々右傾保守化していく過程を反映しているといえる。

参考文献

- [1] 岩波書店. 世界. 岩波書店, 1993年1月-2010年12月各号.
- [2] 中央公論新社. 中央公論. 中央公論新社, 1993年1月-2010年12月各号.
- [3] 文藝春秋社. 文藝春秋. 文藝春秋社, 1993年1月-2010年12月各号.
- [4] 馬場公彦. 現代日本人の中国像. 新曜社, 2014年.
- [5] 馬場公彦. 戦後日本人の中国像. 新曜社, 2010年.
- [6] 段躍中編. 日中対立を超える「発信力」～中国報道最前線 総局長・特派員たちの声～. 日本橋報社, 2013年.
- [7] 佐藤都. 日本の総合雑誌3誌の数量・内容分析からみる日本人の中国に対する関心の変遷. 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 2012-03.
- [8] 杨栋梁主编, 田庆立, 程永明著. 近代以来日本の中国観 第六卷(1972-2010). 江苏人民出版社, 2012年.
- [9] 张玉. 日本报纸中的中国形象. 中国的传媒大学出版社, 2012.
- [10] 刘林利. 日本大众媒体中的中国形象. 中国传媒大学出版社, 2007年.
- [11] 张宁. 日本媒体上的中国 报道框架与国家形象. 吉林人民出版社, 2006年.
- [12] 张广宇. 冷战后日本的新保守主义与政治右倾化. 北京大学出版社, 2005年.
- [13] 吕耀东. 冷战后日本的总体保守化. 中国社会科学出版社, 2004.
- [14] 崔世广. 中日相互认识的现状, 特征与课题. 《日本学刊》, 2011年第6期
- [15] 刘继南, 何辉等著. 镜像中国—世界主流媒体中的中国形象. 中国传媒大学出版社, 2006年.